

(式 辞)

令和元年度、学校法人吉田学園・専門学校グループの卒業式を挙げるに当たり、式辞を申し上げます。

はじめに、ご来賓の皆様にご挨拶申し上げます。

日頃から、学園の教育推進に、ご理解とご支援を賜っております、多くのご来賓の皆様、ご多用の中、本卒業式にご臨席賜り、心よりお礼申し上げます。

次に、保護者、ご親族の皆様にご挨拶申し上げます。

ただ今の心境は、いかがでしょうか。学生達が、本校に在学しているときは、各ご家庭でも様々な出来事があったことと推察いたします。そのようなことから、今日この卒業式を迎えることが出来、まずは安堵といったところかと思えます。ご卒業、心よりお祝い申し上げます。

学生の皆さんにお話しいたします。

ただ今、卒業証書を授与いたしました皆さん、卒業、おめでとうございます。皆さんは、今、卒業証書を手にし、入学以降の様々なことを思い浮かべているのではないのでしょうか。学園行事としては、入学式から始まり、ガイダンス、健康診断を経て、沖縄研修旅行、各種部活動大会、学園祭、スポーツフェスティバルと続き、正に、最後の卒業式を迎えました。この数年間の学園生活において、初めて親元を離れた一人暮らしに、苦戦をした人もいたのではないのでしょうか。また、バイトに明け暮れた人や、友人関係等がうまくいかず、足が学園に向かない日があった人もいたことでしょうか。そして、何よりも、専門的な学習について行けるかどうか、不安を覚えた人もいたことと思えます。皆さんは、そうした悩みや困難を、家族や友人、教職員の支えのもと、自らの意志で乗り越え、晴れて本日の卒業式という舞台に立つことができたのです。皆さんの頑張りに、心から敬意を表します。

さて、いよいよ旅立ちの時を迎えました。

そんな皆さんに、これからの人生を、自分自身を大切に生きて欲しいという思いを込めて、私から一つの言葉を贈ります。

それは、「春色に高下（こうげ）なく、花枝（かし）自ずから短長」という禅の言葉です。

春色は、春の色と書きます。つまりは「春の訪れ」という意味です。高下は、高い・下と書きます。つまりは「高い低い」という意味です。続けますと、「春は、身分の高い低いに関係なく誰にでもやって来る」となり、「平等」を表します。花枝は、花・枝と書きます。短長は、短い長いです。「花や枝などは、陽の当たり具合で、短いものもあれば長いものもある。咲いたりする時間も、短かったり長かったりする」となり、これを「不平等」と捉えることもできますが、私は、「個性」と解釈したいと思っています。

言葉全体をまとめます。

「人生の中で、うらかな春のような時は誰にでも必ずやって来る。それを早く受ける者もいれば遅く受ける者もいる。人の持つ個性によって変わってくるのだ。」と、そんな意味になると思います。

人はそれぞれ違います。違っていいのです。

そのことを踏まえ、春のようなうらかな幸せな日々が簡単に手に入らないからといって、人生を投げやりになったり、諦めたりせず、前向きに物事を考え、努力し、行動して欲しいと思います。そのような生き方が、自分自身を大切に生きていくというこに繋がるのだと思うのです。

社会は激動です。

人工知能（AI）による社会の創出は、パラダイム・シフトを引き起こします。人生100年時代の訪れも、働き方や生き方そのものを問いかけてくるでしょう。減少し続ける出生数は、国の存続に関わるほど、深刻な問題となっています。そして、自然災害や新型ウィルスが、世界を脅かしています。このように、皆さんは、予想できない荒波の中に船をこぎ出すのです。

どうか皆さん、六十年以上の歴史と伝統を持ち、三万名にも達しようとしている同窓生がスクラムを組む、道内屈指の教育機関に成長した、我が吉田学園において、学んだ知識や技術、取得した資格、身に付けた人格等を力として、果敢に人生を切り開いていってください。卒業は、正にスタートラインです。

本日、この佳き日に卒業する全員の前途に、幸多からんことをご来賓の皆様、保護者の皆様とともに心から祈念し、式辞といたします。

令和二年三月十三日

学校法人吉田学園 学園長 大山 節 夫